志太中 第十九回・二十回 合同同窓会

同級会開催地を、静岡・焼津・藤枝・島田として三年目毎開催している。

昨年十一月四日焼津ホテルで開催。参加者三十八名、はるばる東京・山口から参加してくれた方もあり盛況であった。

志太中の門を昭和二十一年（十九回生）昭和二十二年（二十回生）と出て早四十年。少年期の面影しかない級友との出合いに、四十年という空白をどうしても埋めることのできない顔も見える。そろそろ停年退職期を迎え、第二の職場へと頑張りを見せている人もいる。

今回は、郷土史の造詣が深い藤井先生に「豪商」と題して講演をお願いした。高洲村築地の豪商勘右エ門さんの一生にかゝわる話。栄枯盛衰世の常とは申せ、細く長く生きられることに越したことはなさそうだ。歳を感じさせない藤井先生の授業を思いかえしていた人も少なくはなかったであろう。

戦中・敗戦直後といった志太中時代では勿論修学旅行などありよう筈もない。次回は一泊同級会を開催しようという機運がある。（幹事　甲賀）

《大学進学の近況》 新卒業生実力を発揮

教育に関する社会的関心は日々に強まり、マスコミ関係で教育問題が論じられない日はないと言ってもよい。校内暴力・いじめ・登校拒否等の諸問題は深刻な社会問題となっているが、お蔭で母校においてはそうした憂慮すべき問題は皆無である。しかるに、複雑化する現代状況の中で激しい受験競争の渦中にある生徒の高校生活を個々のレベルですこやかなものにするために、母校では、「カウンセリングルーム」を設置し、生徒の相談に応じている。

大学への進学熱が高まり、本校でもほぼ一〇〇%の者が進学を希望している。入試制度がゆれ動く中で、本校においては常に建学の精神をふまえて堅実な教育を施してきたのであるが、その教育成果は着実にあがっていると言ってよい。授業と部活動、それに学校行事のバランスがよくとれており、生徒達は、「人間として大切なこころ」をゆたかにしながら受験的な力をつけていると言ってよかろう。大都市で、受験産業の重圧におしひしがれている高校生に比べれば本校の生徒は、将来、たくましく自分の道を歩んで行くたくましい活力と、ゆたかな感性を保っていると言える。左に示す第一表は、最近四年間の大学合格者数、第二表は、今春の合格校の概略である。いわゆる進学成績は県下屈指と言われており、その内容は年々充実してきていると言われている。地元の静岡大学への合格は常時県下で第一位を占めている。来年度から入試制度が大幅に変更するのであるが、本校の堅実な教育は、本質的に変わるものではなく、生徒達も落ちついて学習にはげんでいるので、まず心配はないといえよう。

本校のこうした伝統と実績に呼応して高校入試においても本校はますます難関となり、五十余名が悲運に泣いている。こうした状況であるが故に本校の生徒の一層の自覚が望まれるところである。卒業生の眼から見て、生活態度やマナーのよくない生徒がいた場合、その場で、先輩として厳しいご指導を願いたいものである。

第1表　大学等合格数

区分	61年3月		60年3月		59年3月		58年3月	
	現	浪	現	浪	現	浪	現	浪
国立大学	128	63	108	56	144	42	126	34
公立大学	14	16	13	17	24	16	24	11
私立大学	269	222	174	235	240	217	230	143
短期大学	15	6	9	4	16	1	7	1
準大学・専門・各種学校	3	4	12	1	21	2	14	1
計	429	311	316	313	445	278	401	190

第2表　61年度大学別合格数

北海道	6	新潟	3	熊本	1	工学院	4	東洋	11
旭川医科	1	金沢	1	長岡技術科学	1	国学院	8	日本	33
北海道教育	1	山梨	4	高崎経済	2	ICU	2	法政	23
弘前	1	山梨医科	1	東京都立	3	駒沢	12	武蔵工業	4
東北	8	信州	2	横浜市立	2	芝浦工業	12	武蔵野美術	5
茨城	1	静岡	95	都留文科	3	上智	8	明治	31
筑波	7	浜松医科	5	静岡女子	3	昭和女子	4	明治学院	4
宇都宮	2	名古屋	5	静岡薬科	11	成蹊	4	立教	6
千葉	5	名古屋工業	1	名古屋市立	1	成城	5	早稲田	31
埼玉	1	滋賀	1	岐阜薬科	1	専修	19	神奈川	10
東京	4	京都	2	神戸商科	1	大東文化	8	神奈川大学	13
東京学芸	4	奈良教育	1	市立下関	1	中央	24	同志社	5
東京農工	2	岡山	2	都立科学技術	2	東京経済	8	立命館	7
東京工業	1	徳島	1	千葉工業	8	東京電機	16	関西	7
一橋	4	愛媛	1	青山学院	14	東京農業	13	関西学院	6
横浜国立	12	九州	3	慶応	15	東京理科	21	その他大学	91

「花」の画家 森多優公氏 東京で活躍

本校第三十一回卒業の森多優公（本名小林勝利）氏は、志太郡岡部町小園の出身で武蔵野美術大学出身の画家である。同氏は本校在学中から美術部で活躍し、大学卒業後執拗に「花」を描き続け、それは今でも続いているのであるがここ数年、併せて「山の風景」にも関心を示している。彼の追究する「花の世界」は、「具象」と「心象」の交錯する世界で、高度なリリシズムの世界を構築している。氏の活動を見つめて来た者からすると、それは「俄然」でも「偶然」でもなく、まさに「必然」だったことがよくわかる。以降、氏のリリシズムは一段と純度を高め、飛翔せんとする心に付着していた微少な「濁り」塵のような「爽雑物」を棄て去っているのである。

去る四月二十一日から二十六日まで、「日本画による花と風景」と題して、文芸春秋画廊において氏の個展が開かれた。その個展に際して美術評論家の田中修氏は、森多氏の「深い自然観照」と「すぐれた意匠感覚」を高く評価している。今後の御活躍を期待する次第である。

体験志太中史② グランド・校舎・制服……

松村八十治

往時より千南原といわれていた広大な原っぱのあとに、創立当初、初代錦織兵三郎校長先生はじめ、職員一同、うら若かりし一、二回生諸氏等が、創業の重い使命感に燃え、挙校一致、鍬を握り、鶴嘴を振い、校長自らもモッコを担ぎ、蓮華寺山東端の一角を削った土を埋め立てた、三〇〇メートルのトラックを備えたグラウンドであったが、私が入学した昭和十三年頃には、トラックに使用した細長いコンクリートのコースが、既にコーナー付近に、僅かにその痕跡を止めるのみであった。

校舎は現在の校舎とほぼ同じ方向に、木造二階建の本館（一棟）と二棟が並び、一階正面玄関を入ってすぐ左側が職員室。右側には事務室と校長室が続き、本館と二棟の間には玄関から通じる中央廊下を挟んで、東側は池。西側には花壇と温室とがあった。

中央廊下は二棟までで、その先の階段を降りたところから、一間足らずのコンクリートの通路が、北に向かって走り、武道場の入口近くまで真っ直ぐに通っていた。階段を降りて通路を少し行くと、右側に物理室があって、次に順序は忘れたが、物理の教材機器の入った大きな長い戸棚のある部屋。化学薬品と試験管、フラスコ、ビーカー等実験器具の置いてある部屋や、準備室があり、その奥が化学室である。この物理、化学の二教室の床は、他の教室とは異なりコンクリートであった。

これらの三棟ともいうべき棟と相対する左側は生徒控所である。ここは全校生徒が集まる場所で、朝礼、諸先生方の講話、応援練習、各運動部の壮行会、雨天時の体操授業、寒稽古、県視学をはじめ学校訪問者の紹介等総てここで行われた。控所の南北両側の窓際には各学年別、クラス、個人別に体操帽、体操ズボン、ズックの上靴を入れる整理袋といわれていた袋を吊した。その後も控所は永くこの位置にあって体操授業、部活、生徒集会等様々な催しに使われていた。私は前任校の都合で昭和二十四年四月の半ば頃赴任してきた。たった一人のために、わざわざ全校生徒を講堂に集めるまでもない。然も此奴あ卒業生だ、控所で沢山だということで私の新任式が、いとも厳かに執り行われたのもこの控所である。今は器械、器具が放置され、幻のクラブとなっているが、本校のサッカー部以外のクラブで、個人ではあったが、最初に国体へ出場（昭和三十五年第十五回熊本大会）した体操部が、部員二名、小さなマット二枚で、昭和三十年四月十九日に同好会として発足し、練習を開始したのもここである。今では遙かかなたのグラウンドの片隅に追い遣られ、六十年の風雪に耐えた老いさらばえた哀れな身を、今尚卓球場として存続し、旧校舎の中で生徒の育成にこれ程永く多大な貢献を残してきた建物はない。

教練で使う三八式歩兵銃、十一年式、九六式軽機関銃、一〇年式携弾筒等を格納してある銃器室は、控所に隣接してグラウンドへの出口のところにあった。控所の前の通路を更に北に進むと、右側は奉安殿、次に講堂（現図書館）武道場の順である。武道場の東側には、七、八間ぐらいの間を置いて工作室がある。二十五メートルのプールが武道場の西側で、この間には土を堆積した狭窄射撃をするところと小さな相撲場があった。奉安殿は天皇、皇后両陛下の御真影が安置されている場所であると聞いていた。この前の通路を通るときは行き帰り必ず礼をして通った。別に不思議にも何とも思わなかったが、急ぎのときはいささか面倒であった。武道場はいうまでもなく今の格技場で、学校の創立当初から柔道は実施されていなかったので剣道専用であった。工作室では図画（美術）の授業時間に組み入れられていた工作の時間に鉋、鋸等の大工道具で簡単な道具をつくった。工作室は戦後間もなく、新たに柔道部が創設され、永くその道場になっていた。武道場と工作室の中間には昭和三十年前後に復活した弓道部の矢場ができた。校舎の東側、つまり各棟と控所のグラウンドへの出口側に屋根付きのコンクリートの通路があった。そこには一棟をでたところから銃器室の辺まで渡り廊下が走り、生徒の下駄箱（靴を入れた）や自転車置場があった。自転車置場はその他に、二棟と控所の間にもあったと記憶している。

低い槙の木の垣根で、グラウンドの周辺は区切られていた。西側は今でも二十数本残っている、一回生の手植といわれる防風林を兼ねた松並木である。この並木とトラックの直線コースとの間はもっぱら一〇〇メートル競走に使われた。松並木の北端に現存する一本の古木（楠？）の前あたりがスタートラインであった。東の校舎側には、現在のスタンドはその当時は勿論なく、今その後にある所所に柄檀の木を挟んで松の木が同じように並んでいた。今の本部席の真後ろあたりにバレーコートがあって、控所からでてきたグラウンドへの通り路の南側には、金網で囲ったテニスコートがあった。他にも二棟階下東端の生物室と化学室との間にもテニスコートが一面あったと思う。講堂の前の控所とプールとの間には、バスケットコートが二面ほどあった。北側のプールの前（グラウンド側）から南に向かって鉄棒、固定された偏平の平行棒、肋木が一直線に並んでいた。その他には助走路のついた陸上競技用の砂場が、北側ゴールポストの後ろにあった。特に戦前の古い卒業生にとっては、六十年振りに訪れた母校の変貌に目を見張ったことであろう。「懐かしいなあ、昔のままだなあ。」と、友と語り学んだわが学舎の、昔日の面影を偲ぶよすがを果して何処にもとめたであろうか。

生徒数は一学年約五十名ずつA組・B組の二クラス。五年制で全校生徒約五百名。朝礼終了後各クラス二列縦隊に整列した生徒は、級長の号令により控所から教室に入る。毎時間授業の始まる前は、瞑目して先生のお出でを待つ。登下校は制服、制帽、制靴といって制服は夏季は霜降り、冬季は黒色の服。私が入学した年から国防色（旧陸軍の軍服のような色）になった。制帽の徽章は志太中の文字の入ったベン型である。制靴は単靴。編上靴は許可されず、蹴球靴でもよかった。蹴球靴は革製品で頑丈にできていた。値段は八円五十銭で当時の授業料月額四円六十銭のときである。

毎週月曜日ごとに反省録を提出させられた。高僧大聖を目指す修行僧でもあるまいに、そう番度反省するネタがあるわけがない。たかが紙切一枚のこの反省録の提出は、それこそ難行苦行であった。

松村八十治氏は本校第十四回卒業。本校で体育科教師として活躍され、昭和六十年三月末退職された。
本文は同氏の『グランドこもごも記』の一部分である。